

氏 名	兪 期 天
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第10号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題 目	学位論文題目 陶磁器における絵付けと形体の展開 —染付技法を中心に—
	研究作品題目 「釉下混合彩蓮文大皿」（51×51×10cm）磁器 「釉下混合彩南天紋大皿」（53.5×53.5×10cm）磁器 「釉下混合彩紅葉文大皿」（48×48×8cm）磁器 「染付葡萄文壺」（45×45×53cm）磁器 「葡萄文壺Ⅱ」（42×42×39.5cm）磁器 「南天紋壺」（28×28×33cm）磁器 「蓮文壺Ⅱ」（33.5×33.5×43.5cm）磁器 「蓮文壺Ⅰ」（33×33×37cm）磁器 「葡萄文壺Ⅰ」（19×19×39cm）磁器 「蓮文扁壺」（14×40×52cm）磁器（6点）
論文審査委員	主 査 教 授 太 田 公 典 副 査 准教授 長 井 千 春 副 査 講 師 本 田 光 子 外 部 兵庫陶芸美術館 審査委員 副館長 弓 場 紀 知

## 1 学位論文の要旨

本研究は、陶磁史においても重要な位置を占める染付技法について、成立と変遷を概観したうえで、その新たな展開を提示するべく、実験に基づき作品制作を行うものである。染付は白磁の胎土にコバルト顔料で絵付けをし、透明釉を施して1300℃程度で高火度焼成された磁器である。中国圏の白磁とイスラーム圏のコバルトが出会うことで誕生し、中国を中心に韓国、日本へも大きな影響を与えた。論者は、酸化銅と酸化鉄による混合顔料と、石膏型を用いる型押し成形という、絵付および形体のうえで新しい試みを行い、染付史上に新しい一頁をひらくことを提案する。

本論の構成は以下の通りである。まず第Ⅰ章「序論」で研究の目的、範囲と方法を確認したうえで、第Ⅱ章「染付の成立」で胎土である白磁と顔料コバルトの起源と、染付が誕生するまでを追う。続く第Ⅲ章「染付の考察」では釉下彩顔料と染付壺の形体について述べた後、幾つかの作例を挙げて具体的に造形を記述する。最終的に第Ⅳ章「染付作品の展開」において前章までに論じた内容を踏まえ、新しい試みを取り入れた自作を制作する。第Ⅴ章「まとめ」で全体の総括を行う。

第Ⅰ章「序論」では、第1節「研究の目的」において染付技法の歴史上に次なる展開を引き出すという本研究の目的を述べ、第2節「研究の範囲と方法」で染付の定義と名称を

確認し、文献・作品調査・作品制作という研究方法について述べ、本論で扱う範囲を中国・韓国・日本に限定した。

第Ⅱ章「染付の成立」では、先行研究の蓄積に抛りながら、白磁とコバルトをその起源に遡って展開を追った。第1節「白磁の誕生」では、まず釉薬について鉛釉、灰釉、青磁釉を経て鉄含有量を抑えた透明釉が生み出されるまでを述べ、次に窯について高火度焼成を可能とする改良の軌跡を追い、登り窯の完成と景德鎮での小型化に注目した。さらに白磁胎の原料である高嶺土（カオリン）についてまとめた。第2節「コバルト」では、起源がイスラーム圏にあることを確認したうえで、コバルトにはイスラーム圏由来のスマルトと中国由来のアスポライトの二種類があることを指摘した。

そして文献上に見られる中国での染付顔料の使用や、元王朝がイスラーム文化から多大な影響を受け、染付成立の要因となったことを述べた。第3節「染付の誕生」では、中国における染付の誕生と展開を元から明にかけて概観し、韓国・日本という周辺国へと伝来した染付について述べた。

第Ⅲ章「染付の考察」では、染付を顔料、形体、絵付という三要素から論じた。第1節「釉下彩顔料における考察」はまずコバルトの使用についてイスラーム圏から中国・韓国・日本に至るまで俯瞰した。続いて、酸化鉄を顔料として用いる鉄絵と、酸化銅を顔料として用いる釉裏紅、辰砂釉について中国・韓国・日本に分けて述べた。

第2節「染付壺における形体の考察」は壺の起源から始め、陶磁器の形体の変遷を概観した。そして朝鮮時代の染付壺の変化を示し、中国からの影響を儀礼的な機能やロクロ形式の比較を通して考察した。第3節「実作品における絵付の考察」で元・明および韓国の代表的な染付作品を数点取り上げ、形体と絵付の詳細な観察を通して作品の特質を抽出した。

第Ⅱ・Ⅲ章で概観した歴史を踏まえて、第Ⅳ章「染付作品の展開」では実験に基づく新しい作品制作を行った。制作時の条件について、第1節「制作要素」で釉薬と素地の成分構成、および焼成で使用する設備と温度変化の測定値を示した。第2節「作品制作」では混合顔料の作成およびロクロと石膏型による成形に関して、実験経過と結果をまとめ、さらに絵付の過程を示した。染付の顔料として、発色の安定したコバルトを中心とする混合の事例は多い。コバルト以外の顔料を用いる試みとして、酸化銅と酸化鉄を混合した。実験の結果生み出された作品について、第3節「作品説明」で特徴や工夫、新規性について解説した。中でも「釉下混合彩蓮文大皿」はダミ筆による混合顔料の器面への施用効果が着目された。酸化銅と酸化鉄は一つに溶合して新たな色が生じるのではなく、それぞれが発色して新しい質の色が現れたのである。また「蓮文扁壺」では、従来のロクロ成形では得ることのできない新しい器形を石膏型の活用により作り出すとともに、複数個の展示・鑑賞方法を試みた。

以上のように、本論は幅広く多角的な視点から陶磁史における染付の歴史と意義を踏まえたうえで、これまでにない新しい造形の試みとして混合顔料と石膏型を用いた型取り成形により作品制作を行うものである。染付に対する理解を深く掘り下げて視野を広げること、制作に対して多くの示唆を得ることができ、さらには自らの作品制作の歴史的位置付けを明確にし得た。本研究は、さらなる陶磁史の展開につながる第一歩なのである。

## 2 学位論文審査の要旨

兪期天氏の研究は学位請求論文「陶磁器における絵付けと形体の展開—染付技法を中心に—」および染付磁器作品から成り立っている。兪氏の研究は作品制作に大きな比重を持たせているが、論文において自作の歴史的 position および現代的意義が説得力を持って論じられている。以下はその要旨と審査結果である。

論文は第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章で陶磁史を中心とした前半部とし、第Ⅳ章、第Ⅴ章では作品制作を中心とした後半部として構成されている。

第Ⅰ章序論の研究目的では、染付技法の歴史研究を行い、自作の展開について考えることを目的として、研究範囲と方法を高火度焼成の染付とその他の顔料を含めた研究とし、文献調査と熟覧調査を基に中国、朝鮮の作品考察を行い、釉薬実験と作品制作を行うこととしている。歴史研究の中で呉須顔料以外の釉裏紅、鉄顔料についても染付技法展開の歴史に表れる過程と捉えることは独自のアプローチと言える。

第Ⅱ章染付の成立では中国陶磁がその中心であることをと、染付に至るまでの、白磁の成立、釉薬の起源、窯の起源について考証を進める。白磁が生み出されたことが、呉須の青さを引き出す重要な要素であることを解き明かしている。

第Ⅲ章第1節で染付誕生として、元時代末の至正様式の成立から明時代様式を解説、それらが韓国日本に伝わった後のコバルト顔料、鉄顔料、釉裏紅について論述している。第2節は形体の研究として、壺の容器としての起源から、染付に至るまでの形態の意味、韓国における染付壺の特徴を述べ、儀礼品として立壺の様式が完成することで鑑賞用陶器としての意味が成立することに注目している。第3節では大阪市立東洋陶磁美術館所蔵作品の熟覧を通じた考察から、描かれた文様がイスラム地域から中国、朝鮮、日本へ伝わるにつれ、其々の国で作られた染付に各国の文化的影響が見られることを述べている。

第Ⅳ章は作品制作で必要なことについて述べている。第1節では胎土、焼成、釉薬の還元焼成と釉裏紅についてコロイドの存在など経験を基にした科学的知見を述べている。第2節では顔料（混合顔料）の実験、制作（成形）では胴継ぎ壺、周囲を切り落とす四方皿、石膏型を使った扁壺の制作研究を行い、絵付方法の研究について各作品の完成に至るまでの独自の制作方法と制作意図を解説することで、自作の歴史とのつながりを述べている。

第Ⅴ章まとめでは、自作が、染付の歴史の中でどのような意味を持っているか、混合顔料、石膏型の技法によって、今後の制作に一つの方向性を見出したことを記している。

提出された作品は以下の10作品である。

- ①「釉下混合彩蓮文大皿」（51×51×10cm）磁器
- ②「釉下混合彩南天紋大皿」（53.5×53.5×10cm）磁器
- ③「釉下混合彩紅葉文大皿」（51×51×7.5cm）磁器

第Ⅳ章2節における混合彩技法で制作された作品①は、蓮文の混合彩絵付けと吹き墨を使い本論文提出作品に代表される絵付け技法がこの一作に網羅され以後の制作に対する意欲を感じさせる作品である。②③は混合彩技法を「南天」「紅葉」のモチーフで制作したもので呉須吹き墨の部分に白抜きのシルエットを入れた使い方の特徴が見られる。

- ④「染付葡萄文壺」（45×45×53cm）磁器
- ⑤「南天文壺」（28×28×33cm）磁器

- ⑥「葡萄文壺Ⅱ」(42×42×39.5cm) 磁器
- ⑦「蓮文壺Ⅱ」(33.5×33.5×43.5cm) 磁器
- ⑧「蓮文壺Ⅰ」(33×33×37cm) 磁器
- ⑨「葡萄文壺Ⅰ」(19×19×39cm) 磁器

第Ⅳ章第2節における胴継ぎ技法を使い④～⑦は成形している。大壺時期制作の技法としては良く知られているが、継ぐ方法に独自の工夫と⑤⑥では全体に捻じれのある鎬を入れ大きさのみでなく作品としての形体の装飾に工夫があり後の扁壺に結びついている。⑦は胴継ぎ成形されているが高さは40cmほどである。絵付けと大きさのバランスについて研究するために制作しているため試作的な印象はぬぐえない。⑧⑨は継ぐことなく全体を一塊の粘土を使い成形している。形と絵付けの研究を意識した作品である。⑨は余白を生かした絵付けが成功している。

- ⑩「蓮文扁壺」(14×40×52cm) 磁器 (6点)

第Ⅳ章第2節石膏型による張り込み技法で制作された扁壺はこれまでの成型技法と絵付け技法の集大成であり完成度の高い作品となっている。展示では5点を一つの群として展示をすることで、これまでの一つの作品という考え方から発展し、同じ形の繰り返しと少しずつ違った絵付けすることで新たな空間表現となっている。兪氏の陶磁器における伝統技法修得の後に表現された、現代に生きている彼らしい作品である。

東アジアにおける高火度焼成陶磁器の歴史は世界の陶磁史から見て先進的な技術であり美術的評価も高い。論文は、染付けの成立について白磁とコバルトそれぞれの起源から説き起こしたうえで、顔料、形体、絵付という各要素を、これも歴史の変遷から自らの作品まで有機的に結びつく形で論述している。制作過程を書いた後半は独自の酸化銅と酸化鉄を融合した新しい顔料の開発と、石膏型を用いる事で新たに可能性となった扁壺という形体に独自性が発揮されている。論文ではこの二点の着想にいたるまでの経緯についても歴史を遡って論述し、染付技法の伝統を引き継ぎながら、新しい試みを加えた自身の作品の意義を丁寧に説明している。

また、論文の末尾において兪氏は、陶磁史の流れを自らの制作活動をもって引き受け、自身の制作が陶磁史の新たな展開となることを期すると述べる。その進取の気性と使命感が研究全体を貫いていることも、高く評価すべき点である。

学位請求論文「陶磁器における絵付けと形体の展開—染付技法を中心に—」は染付について陶磁史の内容が整理して論述され、これと有機的に結びついた質の高い作品制作に到達した独自性のある作品と論文であり、博士学位に値する高い内容と判断した。

### 3 最終試験結果の要旨

兪氏は現代の韓国陶芸と陶磁史研究の状況を踏まえ、日本留学で学んだ染付制作の意味など自らの出自に立脚した視点から染付磁器を問うため、染付発生の地中国を中心とした陶磁史と、韓国に伝わった染付文様の系譜を博士論文のテーマとした。それらは作品制作の背景として重層的な意味を持ち、提出作品にみられるような抒情性豊かな染付釉裏紅絵付の制作に繋がり、その形体においても扁壺を含む新たな可能性を感じさせる作品群として結実している。

作品と論文の高度な内容は博士学位に値するもので、作品と論文の相関関係は高く、新規性・論理性をそなえ優れて質の高い内容と認められる。よって実技系博士論文に望まれる要件を基準以上に満たしており、学位の資格授与に値すると判断した。